

北社会ニュース101号

2014年4月10日

発行者：鈴木壮夫

(1) 4月10日(木)開催 第319回北社会

講師：吉田 明氏 (高16回) 元朝日新聞社社会部記者

テーマ：「政府は抗日でも、庶民は好日、矛盾だらけの大国、中国」

鈴木壮夫から本日参加者の皆さんに先ずは質問。

中国語で日本は日本、イギリスは英国、フランスは法国、ドイツは德国、それではアメリカはどんな漢字でしょうか。

私は商社の駐在員として1986年から1988年まで2年半、北京に単身赴任しておりました。鉄鋼の担当でした。当時は中国の鉄鋼生産量は自国の需要を賄うレベルではなくかなりの量を日本に依存していました。日本の高炉メーカーが中国の五金会社と毎年商談して量と価格を決めていました。私はトーマン(旧社名：東洋棉花)という鉄鋼部門が弱い商社の社員でした。でも、商品知識その他では他商社の駐在員よりも強く、個別商談ではそれなりの実績を挙げることができたと思っています。

当時のことを箇条書きで綴ります。

「赴任直後の違和感」

北京に赴任して、一ヵ月余り、何かすっきりしない感情があった。何だろうと気にしていた。下手な中国語でスタッフと会話していた時、ハッと気付いた。「第二次世界大戦で中国は戦勝国、日本は敗戦国」と。米国には負けたが中国に負けたなんて多くの日本人は思っていない。でも、それ以降注意して中国人の振る舞いを見ていると戦勝国の自負が感じられた。最近の日中関係でも無視できない一面だと思っている。

「一人っ子政策」

ある工場を訪問した時、通用門の側の黒板に女子労働者達の“月経の日にち”が記載されたリストが貼られていた。国策を実行するには人民一人一人が相互に監視しあっていることを知った。プライバシーより、国策、これが中国だと。

「中国人の対日本感」

当時の例えば電気製品。日中合弁会社の製品は中国人が製造しているのだから信用できない。MADE IN JAPAN を買いたいとの高い評価があった。去年の数字だが中国に進出している日系企業は約2万2千社ほどあり、12~13万人の日本人が働き、貿易額は3千500億ドル、中国人の信頼があるからこそその数字だと思っています。

当時の国家首席、趙紫陽とはゴルフ場でよくお会いした。お互いが尊敬の念を持ち、信頼関係を築く努力をすべきだと強く思っております。

(2) 北社会 300回 記念紙

庄子信氏(高11回)のご協力の下、制作中です。6月には発刊できる予定です。

※追記：今年4月の二高入学生、男子191人 女子129人 合計320人。